特 別 企 画

歯学部の未来を考える～新学部長へのインタビュー

平成24年４月から松口新学部長が就任されております。特別企画として松口新学部長にお忙しい時間を頂いて，鹿児島大学歯学部の近未来について語って頂きました。

インタビューア：佐藤友昭

イ：松口先生，本日はどうかよろしくお願い致します。

松：こちらこそ，宜しくお願い致します。

イ：そろそろ，学部長になられて，１年が経とうとしているのですが，１年間振り返ってどうでしたでしょうか？

松：本音で言っていいですか？（笑）。

イ：もちろん，本音でお願いします（笑）。

松：やはり，思っていたよりも大変でした。

イ：どのようなところが？

松：忙しいとは聞いていたのですが，単純な学部の業務以外にもたくさん仕事がありました。例えば，来年度から学校教育法と国立大学法人法の改定が行われますので，それに伴った各種の改定，改革を大学本部でやらなければいけない。それに関する大学全体の会議が例年に比べてかなり頻繁に行われたこと。また，大学全体が変更されるに当たって，当然，医歯学総合研究科と歯学部の規約や今までのやり方を変えなければいけないことがあります。これらについての話し合いやそのための資料作成の業務がたくさん入ってきたという事です。それに，昨年は学部長の仕事の当たり年（笑）でもあったそうで，例えば，学部長になって間もなくの昨年６月には，全国の歯学部関係者が集まる全国歯科大学学長・歯学部長会議が鹿児島で初めて行われましたので，それについての企画や準備，そして大会での司会・議事進行に非常に気を使いました。

イ：会場の手配なども先生がされたのですか？

松：それに関しては，事務方にやって頂いたのですが，会議のタイムスケジュールや議題の選び方，果てはお土産を何にするかまで決定しなければならなかった。それは例年には無い仕事でした。また，今年は歯科医学教育学会が鹿児島で行われることになりまして，これも鹿児島では初めてのことです。この学会は学部長が会頭になる決まりですから，去年の北九州で行われた歯科医学教育学会に次期会頭として出席して挨拶をして参りました。このような訳で，今後は歯科医学教育学会についての来年に向けての準備が入ってきます。煩雑な業務の殆どは，実行委員長の田口教授と歯科医学教育実践学分野のスタッフが中心になって行っていただいているのですが，会頭としての会議の出席や決定事項もありますので，そういうのも追加の仕事になりました。

松：先ほど話した大学改革についての追加事項として，鹿児島大学では今年４月から教員組織と教育組織が分離されることになっています。新たに学術研究院というものを創設して，教員人事に関してはその学術研究院の管轄として一括してしまう。つまり従来の学部のシステムと教員人事をセパレートなものとする事に決まっています。これに関しても，全体の会議や学部における規約変更の為の仕事が現在も続いています。このような訳で，思った以上に忙しかったと言うのが正直な本音です。

イ：学術研究院を置くメリットは何なのでしょうか？

松：これが上手く機能発揮すると，我々の所属と仕事が分離しますので，学部間の交流が盛んになります。例えば，今まで歯学部に在籍していた教員が他の学部に講義に行くことができる。逆に，例えば工学部でしか講義していなかった先生が，歯学部で講義することができるようになる。つまり，自分の専門の分野の教育を他の学部で講義することができます。学術研究院を置くことで，学部間の閉塞性を無くし交流を盛んにすることが究極の狙いだと思います。

イ：歯学部が創立されて30年以上経っているわけで，そろそろ未来的な話に移って行きたいのですが，取り敢えず，現在の鹿児島大学の長所と短所をどのように分析されていますか？

松：よく言われる事ですが，私達の鹿児島大学歯学部は南九州の唯一の歯科大学と言う立場ですから，地域医療，特に南九州，数多くある離島，沖縄も含めて地域一体の歯科医療に責任を持つ立場にあります。特に離島に関しては，私達は他大学には無いような特別な立場にあると認識しています。更に南九州は高齢者も多い地域です。離島医療や高齢者医療を学ぶ目的であれば，地理的なメリットは大きいと思います。

デメリットとしては，鹿児島大学は地方大学でもありますので，卒業生にとっての魅力的な受け皿を作っていかないと，人材が中央や大都市の大学に出て行ってしまうケースが結構多い。せっかく，良い学生さんや研究者が育っても，最終的に他のところに移ってしまって，この大学に最終的な貢献をしてもらえないと言うことが，よくありますので，そこら辺がデメリットかなと考えています。

イ：このようなことから，鹿児島大学歯学部はどのような方向で改革をしていくのが，ベター，ベストなのでしょうか？

松：多分，一番基本的な考えは，この学部にとって地域医療に対する責任が重要であるということです。文科省や厚労省も鹿児島大学のような地方大学にはそのような責任をメインに求めてきているのだと思います。よく言われますが，単なるミニ東大を目指すというだけではダメで，地域のニーズに根ざした教育，研究，それを担える人材の育成というのが一番重要になってくると思います。ただ，個人的な見解としては，大学は当然最先端で国際的な教育・研究を行う場であるわけですから，単に地域限定の医療・歯科医療を行うだけではいけない。文科省から最近強く求められている大学のグローバル化が良い例ですが，世界に開かれた大学にしなければならない。つまり国際的なレベルでの交流も要求されている。特に鹿児島は地理的に東南アジアとか東アジアに近い訳ですから，この地域との交流をもっと盛んにしていって，そういう地域から人を呼ぶ，学生を取り入れる。あるいは，鹿児島大学から東南アジアとか東アジアの歯科医療の遅れている地域などに人を派遣する，その地域の歯科医や研究者を指導する。そのようなことができる人材を育てて行かなければならないと思います。また，グローバル化と言うからには，他の国から見えるような魅力作りが必要となってきます。そうするとやはり，国際レベルの研究，教育内容を持ちそれを磨いて行かなければならないので，単に地域医療をやっていれば良いとは，考えておりません。それゆえ，国際的に認められるように研究のレベルや教育の質を上げていかなければならないと考えております。魅力的な内容を持っていないと，いくら人を呼んでも来てくれないでしょうから（笑）。これは歯学部に限ったことではなく，鹿児島大学全体に他の国から来ていただける為のレベルの高い研究・教育というのを持つことは必要で，これを実現するための改革はやって行かなければならないと考えています。

イ：そのためにも人材の育成は大切と考えますが，現在，鹿児島大学歯学部は新しい教育プログラムに改革しようとしていますが，これは人材育成の点でどのようなもの，または，考えに基づいているのでしょうか？このプログラムの売りとなる点はどのようなものなのでしょうか？

松：カリキュラム改革に関して今，小松澤，田口両教授がメインになって担当を行ってもらっています。考え方の基本となっているのは，アウトカム（成果）を基盤とした６年間の一貫教育ということです。目的となるアウトカムについては幾つかの柱を立てています。例えば，患者さんや同僚とのコミュニケーション能力とか，診療・基礎知識とか，リサーチマ

インドとかいったものです。それぞれの能力を，６年間一貫して培っていけるようなプログラムにしようとしています。つまり，ある成果の実現を目的として教授する場合，各学年の理解のレベルにあった内容をよく吟味して，それを６年間に渡ってカリキュラム上に散りばめ，順序よく高めていくのが大きな柱だろうと思っています。

また，コミュニケーション能力の一環として新しく導入されるのが英語教育です。今まで，２年生以降の学生さんは，語学の教育は受けていなかったですので，それを導入することになりました。これも先程話したように，グローバルな人材育成という点では，国際的に通用する人材には不可欠な要素だと思います。もう一つの新しい試みは，学生の研究室配属の義務化です。将来の医学・歯学研究を志向する，もちろん必ずしも志向しなくてもよいのですが，学生さんが実際に研究の現場に入って，出来るだけ早い時期から研究とはどのようなものなのかを見てもらって，研究に対する学生さんのモチベーションを上げてもらいたいし，臨床をしながら研究をしていくような，いわゆるリサーチマインドを持った学生さんを出来るだけ育てていきたいと考えています。もう一つ，新しいカリキュラムで重視しているのが，アクティブラーニングと呼ばれているもので，これは，学生さん達が自分で考えて自分で学習をして行けるような科目や内容を出来るだけ取り入れていこうとするものです。例えばPBL（＊Project－Based LearningやProblem Based Learningのアクロニウム）が代表的なものですが，これについての検討も行っているので，順調に行けばカリキュラムの中に取り入れて活用できることになります。この辺が今回の改革の大きな柱となると思います。

イ：どれ位の期間でカリキュラムの改革達成をすることになるのでしょうか？

松：来年度の一年生を皮切りにやっていこうと思っています。カリキュラムを担当している教育委員会は，私が難しいかなあと思っていたことに対しても素早く実行してくれていて，来年度４月からの改革の意思を持ってやっていただいています。順当にいけば来年度の４月入学の学生さんからカリキュラムを変更していくという形で次第に置き換えていくことになります。ですから，当面は既存の旧カリキュラムと新カリキュラムを並行してやっていくということになっていくと思います。ただし，実際に新カリキュラムをやり始めていくと色々と問題点も見えてくるでしょうから，それらについては適宜対応していかなければならないでしょうし，当初想定していたものが必ずしも上手くいくとは限らないので，その辺に関しては注意しては行かなければならないと思っています。

イ：若手研究者育成についてはどのようにお考えでしょうか？今まで若手の採用は学部に任されていましたが，学長主導型になって，今後どうなるのか？この機会に学部長先生から実際にどのようになるのか？分かりやすくお話していただけたらと思います。

松：人事権は全て学長に移りますので，最終的な人事の決定権は学部の手を離れます。ただ現状のシステムによりますと，学長は学部の意見を聞いた上で，人事を決めることになっていますので，私達が色々考えて適任者を上程していき，それをしっかり学長に説明して理解していただく。ですから，決して学部の意思に反する人事がなされるというわけではなく，また逆に学部の意思を無視したような人事があってはいけないと思います。

イ：若手研究者の育成に関してはいかがですか？

松：難しい問題ですね。（笑）

松：先程も少しお話しましたが，大学の執行部が各部局の実情を必ずしも詳細に知っているわけではありません。また，大学全体の繁栄のためには各学部・研究科の繁栄が必要になるわけです。つまり，部局のどこかのポジションを吸い上られて，若手の研究ポジションがなくなるとか，忙しすぎて研究時間がなくなるとかは，あってはならないことだと思います。逆に若手研究者が働ける環境を増やしていくために，学部の状況について，こちらから大学執行部に話していって，「このような事を考えているから，このような人事をお願いします。」といったコミュニケーションやお願いをしていけるでしょうし，していかなければなりません。

イ：男女共同参画についてはいかがでしょうか？

松：それについては，本歯学部では昔から問題になっていて，現状でここでは，女性の教授職はいらっしゃいません。准教授の先生はいらっしゃいます。男女共同参画の意味としては，男女とも平等に学部に貢献していただける環境づくりしたいと思っております。しかしこれは，男女平等の面からいって，女性だから雇うと言った様な簡単なものでもありません。女性に学部の運営や研究教育をしっかり関わってもらいたいと言う意向はあります。学部としては女子学生が多い学部でもありますので，今後，当然，積極的に考えていきます。しかしこれは平等なスケールで考える事が大事で，女性だから，逆に男性だからといって差別があってはいけないと考えております。もちろん，女性教員については，基本的に数を増やしていきたいと考えておりますが，それを焦って，頭数だけを合わせてしまうと良くないと思っております。

イ：忙しい中，モチベーションの維持や気分転換，時間の使い方はどのようにされているのですか？

松：今までやってきた生化学の教授としての仕事，つまり教育とか研究を極端に減らすつもりはありません。その分ちょっと忙しくはなるのですが，出来るだけ空いた時間を使って，研究に関しては，研究室のセミナーとか研究指導とかは以前と変えてはいないですし，自身で手を動かす機会も残すようにしています。まあ，それに関しては大変な部分もあるのですが，出来るだけ守っていきたいと思います。

イ：時間の遣り繰りの秘訣みたいなのはありますか？

松：決して上手に遣り繰りしているとは思いませんが，学部長として24時間勤務している訳ではありませんし，決して今までの教授としての仕事が免除された訳でもありません。教授としての仕事もやらなければなりませんので，教授としての講義の時間があれば学部長の仕事を他の時間に回してもらう。また，逆の事もあります。つまり仕事の priority を考えながら，時間を上手く遣り繰りしていくしかないですね。

イ：分かりました。いままで，出て来た事以外に先生が行いたい改革はありますか？

松：能力のある人たちが沢山いても，それを発揮できる場がないというのが一番いけないと思いますので，そのようなことが絶対ないようにしていきたいと思います。もう一つ，この学部の学生さんや若手の研究者の考え方，意識の問題かもしれませんが，研究に関してももうちょっと積極的に行っていってもらいたいなと強く思っています。こちらとしては，できるだけ機会を作ろうとしているのですが・・・。例えば，研究セミナーを開催してもあまり人が集まらないとか・・・。各々個人の意識改革が必要と考えれば，なかなか難しい問題ですね。

イ：生化学講座の学生ゼミは先生自身が行っているものですか？

松：はい。

イ：先生の行っている学生ゼミに対する質問もあります。例えば，先生の英語ゼミに対する効果はいかがでしょうか？

松：歯学部生を対象にした英語ゼミのことですね。効果については，個人的にはそれなりにはあるだろうと思っております。例えば，実用英語という点で言うと，ゼミに参加した学生さんの TOEIC（国際的な実用英語検定試験）のスコアが飛躍的に上がったりした事も経験しています。ただ，私が行っている英語ゼミは週１回１時間のみのスケジュールで行っていますし，他の仕事が入ると休ませてもらっていることも多いです。だから，これだけ受けていれば（英語が）上手くなりますとか，論文が読めるようになりますとか，そのようには思っていないですね。一つは（勉強の）きっかけを作って行ければ良いと思っています。（英語の勉強に関しては）自分自身のやり方を模索する参考にしてもらいたいと思っています。週一回１時間の勉強だけでは到底足りないと思いますので，これをきっかけにして自分で勉強してもらう。英語に関しては，よく言われる事ですが，毎日10分間ずつ勉強しようとか，それだけでもかなり効果は出てくるのですね。つまり，知識を教えるのではなくて，きっかけに成るような事とか，英語の勉強の仕方とか考え方とかについてもできるだけ教えるようにはしています。

イ：最後に纏めとして，鹿児島大学歯学部の近未来像

をお話し頂ければと考えております。

松：近未来像ですか・・・。希望を言えば，幾らでもありますね。やはり，鹿児島大学の歯学部に是非来たいと言う学生さんが増えてもらいたいです。教員にしても，ここで是非研究したいとか，或いは教育をしたい，その様なスタッフが集まってくるような学部になればいいなとは思っております。それのためには，色々やらなければならない事は多いと思いますけれど・・。

イ：それについては，先ほどの改革の話に集約されるわけですよね。

松：そうですね。つまり，現状に満足してはいけないと思いますし，勿論，不満があるばかりではありませんし，それなりにきちんとやっている学部だと思います。これはスタッフの皆さんの努力のお陰ですね。ただ，現状で満足するのではいけない。例えば，学部の入試の競争率にしても，本当はもっと上げていきたい。単純に，「偏差値がこれくらいだから，あそこに行きましょう。」と言うのではなくて，受験生に名指しで来てもらえるような学部になって欲しい。そのためには，やはり，我々がそのような学部に変えていかなければならないと思っています。良くないところがあれば，変えないといけないでしょうね。もちろんそれは簡単では無いでしょう。そのようなことが沢山あるから，希望する近未来像の実現は簡単ではないですね。我々ができる範囲で，しっかりした教育と研究をやって，それが評判になれば，学生さんも来たがるだろうし，良い学生が集まれば卒業生の国試の合格率も上がるでしょうし，そういう良いサイクルに入っていければ良いです。これが逆になれば，今度は悪循環になってしまいますからね。皆で努力して，できるだけ良い方向にむけて行きたいですね。

イ：松口先生，お忙しい中，時間をオーバーして語って頂いて有難うございました。

松：こちらこそ，あまりまとまらない話になって済みませんでした。